

## 死の象徴

MEMENTO MORI

桑原謙之

## 一、序曲 (プロローグ)

人の世の儂くして、かくも佗しき物とは知らざりき。唯流れ行く瞬間に操られて、濁りし世の人は憧憬の對象を、美の面影をうつろなる中に追ひ行く。幾多の墳墓は私達に死を暗示するかの如くに冷かに立つて居る。墓石は人々の生への執着の強きを見て驚き、怒り、又憐んで居るだらう。そして人々が遂に死の神に征服されるを見て、冷笑し、又同情して其墓穴を開いてくれる。嗚呼幾千萬年、人の世の流轉。一切が此冷き墓石にひれ伏す。名譽も、權力も、憧憬の美も、凡てが生の渦巻の中に、揉みつまれつ、冷い灰と化す。人はうつゝなに生れて、うつゝなに生きつゝ、夢みつゝうつゝなに死に行く物である。人の世の勝利の大なれば大なる程、其影に姿をひそめた空虚は大きい。血を流して作りあげた、樓閣の敢て、一夜の嵐に、其の残骸をさらす事なきも、やがて朽果ててではないか。朝には限無き青空のもとに、夕邊には山々の赤く照映えた残焼を受けて、遠く泡だてる海原を、足下に眺めつゝ沈み行くアリロボリスの廢墟には、悲みの焔を燃やさしめた何物かが横つて居るに違ひ無い。恰も風雨に曝された墓石の如くに、人類共通の苦惱の表象、死の象徴を、其のプレレインの残柱に刻して居るだらう、今日も亦、悲しみの星が、あの岡の上に、昨日もさうだつた。毎日々々冷い蒼白い光が残柱の影を綾なして居るだらう。

Es ist so nun einmal in der Welt.

時も無い。處も無い。地球は一切の謎を載せて音も無く無限の軌道を滑つて行く。見渡す限り眞暗な、際涯も無ければ起伏も無い闇の底を、盲目の怪物が、血を飲んだ様に膨れて、のろ／＼と這廻る。人間は何れも抵抗力を奪はれて、蚊の群の様に果敢

ない集團を作りながら心細げに縋り合つて居る。間もなく怪物の蹄爪が、一たまりも無く之を踏潰す。暗い戦慄、冷い恐怖。鈍く長く、絶え入る様なマイナが曠野の果をさまざまの機音の様に聞えて来る。何處からともなく長髯の白い翁が現れて囁く。「是が人生と云ふ物だ。」

不可抗の力を秘めた夜の空の虚無の彼方に數多の星が黄金の銚を鑿めて居る間を、時々流星がと矢の様に走る。何と云ふ靜さだらう。僕の心臓は鳴を鎮めてやがて其活動を停止し、夢の様な境界を跳び越えて行く。今、愛や肉や生活や神に對する堪え難い精神の迷ひと、渴慾とが、此神秘を宿した様な廣大な虚無の中に徐々に、癒されて行く。

死の勝利。薄絹のヴェールに覆はれたる。仄なる世界。淡き焔の光りに思ひを乗せて、甘苦しき香を散らしつゝ、かくも艶にかくも美はしく、聖なる愛の囁きをたゞへて、遠く近く、清らかに、健やかに、穢なき涙ものして。嗚呼、死の都。

さらば。ユリデチエよ。是が永久のお別れだ、凡ての浮きし世の人々の心が、斯くある如く、オルフェオスの心は、そうであつた。曾てトロイアにあつた野は火焰に葬られ、エネアスは都城の廢墟を残して立去つた。自らの戦に祖國を追放された憂苦の民達よ。イロイアの廢墟も亦亡びたのだ。

幾千年の昔より、凡ての人生は夢の如く過去つた。牧人の樂しき音律は、悲みの中の涙の中に一脈のどよめきを残して消えた。橄欖山の森をたゞへた乙女達よ。して走者の如く、人生の燈を渡す。(Et quasi cursores vitæ lampada tradunt) 希臘の捧燈祭の處女達よ。人の命の短かくて、風の中の燈の如く、果敢なき、かくて果つべき命と知りながら、涯しなき旅路に棘の荊を分けて、何が故に、斯も受難の生涯は續くのか。

Vanitas vanitatum, et omnia vanitas — バイブル。

無の無なる、虚の虚なる、よしや今幸福なるも、凡は浮きたる雲の上に、そして塵の如くにまた空に歸す。

## 二、懷疑宣言

或語らない些細な事件が、時として人間を、其運命を一變する事がある。シユミツドボンの云ふが如く、其は笑ふ可く、餘りに不可思議な、悲む可く餘りに些細な、且又、茶化せんとして茶化し切れぬ。嚴肅な過程である。地上にはホレイショの智識では夢想だに出來ぬ澤山の事柄が存するのだ。其は利那の問題である。其利那の消滅する時、あらゆる人生の詩、青春、美の秘密與へられ行く人生の光り——早き曉方の濁り無き草の香・春の初めの蘇る様な心よさは眞夏の夜の夢の如く、遙か彼方に流されて居る。汝の夢は唯單に一個の夢に過ぎないのだ、併し人間にとつて夢の夢たる事を自ら知る時……此瞬間に於て汝は不朽である。「人生とは？」……かく考へる其瞬間に於て汝は不朽の美の反映を受けて、高い處あらゆる滅ぶる物、過ぎ行く物の上に立つて居る、然も此利那は永劫迄も續いて行く。

ツルゲネフは未だ生存中、自分が死ぬる時何を思ふだらうかと云ふ事に就いて語つた。「私の生涯の詰らなく費された事、其を眠つたり夢みたりして暮らした事、其賜物を樂むに無能力であつた事を思ふだらう。そうだ、もう是が最後か私は此生涯の中に未だ何事も爲し遂げて居ないのに、彼の半ば開かれた眼は超越し方の幸福であつた時や、自分を愛して居た人達の邊りをさまよひ、かくも儚く消えて行く自分の生命の寂さに、遣る瀨なき吐息を漏しやがて其胸には大きな空虚が限り無く擴つて其人の意識を麻痺させる。死神への最後の抵抗の爲に打震える中過去の罪惡の記憶が其人の抵抗力を奪つて後悔の焔に燃るばかりの苦しみを感じるだらう。だが其處には何物かが。そうだ、墓の彼方には何物かが私を待つて動いてゐるに違ひ無い。何が故に人々はかくも苦しき儚き受難の旅を續けるだらうか。ニイチエは戦ひを、イブセンは生きる事を、ロマンローランは反抗を教へた。次の世界、死の世界、には苦しみも悲しみも無い。苦しみも悲しみも現世のみの物である。其故に我々は少しでも長く生きのびてもつともつと多くの悲しみと苦しみとを生きて居る間に嘗めようではないかとゴリキイは教へる。何故か。私は唯信する。人は死ぬべき義務を有し、且又死に得る者の幸福に就て。

曾て十九世紀を襲つたサン・テレーヌの悲しき遠隔は其儘葬り去られただらうか。産業革命以來、機械の發達に依つてパンの道を拒絶され行く現代に於ては、其は更に大なる物でなければならぬ。生きんとする意志が血みどろに成つて遂に敗れ、死のみが有らゆる戦ひの唯一の勝利者となる。そして其は眞理である。

人々の無智に乗じて光明と希望の魔法の言葉を以て神々の薄明の中に浮立たせた處の天國と云ひユトピアと呼んだ物も、今や朦朧として未來の彼方に沈んでしまつた。有らゆる人が慰めの幻、幻影の美を見失つて悲惨なる貧困と荒廢の中に立つて、醜惡なる衣を纏ふ時。嗚呼最後の審判だ。メフィストフェーレスが凱歌をあげて居る。凡てのファウストは絶望に暮れて居る。人の世の續く限り、有らゆる物は此状態に置かれるのだ。

幾多の人は無關心な星座に向つて、無言の疑惑を投上げた。だが私達は尙其答を受取る事は出来ぬ。懷疑の眼、無色の併し底知れぬ深い眼。かくてスフィンクスは生命の無い砂の大洋の上に巨大なる頭を現はして空を見上げて居る。或時は悲しみの星を浴び、或時は美はしい月の光を受けながら見つめて來たスフィンクスは何等かの眞理を私達に物語つて居るに違ひない。併し其言葉は無聲であり不可解である。光其は黄昏の淡い光であり、闇其は永劫の闇である。解けざる幾多の謎は宇宙の混亂の反映として、世の混亂の中にそゝり立つて居る。其處には何等神の顯示もなく、天國への希望も無く神あれば盲目の神であり、惡魔的幻想に魅せられた半神半獸である。一切は謎であり、其は永遠の謎である。謎を謎として、其儘死に行く愚者は幸福であり、謎を解かんとしてスフィンクスの深淵に立入る賢者は禍ひなる哉。だが幸とは何ぞ？。賢者と愚者、幸福と不幸。其は單に十と一の可變的量の名稱に過ぎないではないか。振子は常に振動して居る。私達は振子が油の切れて止まる時の事を考へなければならぬ。十と一の和が零となつて、其振子が正負の中點に位した儘死に行く人は幸ひな哉。そは垂直軸を無限に延ばし得る故であり而も其は一個の眞理の象徴としての生命を虚無の中に純粹持續し得る故である。かくて幸なるは悲む可く、禍なるは喜ぶべき哉。

ボツニュエ僧正は其「世界史論」に於て宇宙の創造を述べたる後神の寵兒であつた人間の始祖アダムが神の嚴命を犯して墮落

し、勿ち人間が衆怨の府となつた状態を描き出してこう云つて居る。

「最早天地は前日の如く人間に對して笑ひ掛けない。天はもうあの清朗な空氣を持たない、神は人間をして幸福を樂しませんが爲に萬物を創造されたのだが、勿ち人間に對して萬物を苦痛に變化せしめた。」

ボツンユエが一切を歸納した「神の攝理」なる言華は時代遅れの妄斷と非難されとも、其處には何か「超自然の存在」宇宙を支配する自然法則、或は何等かの絶對的な意志、偉大なる力が認識される。且又其結論に對する是非判斷を檢討しなくとも其等の力に對する人間の力の微弱であり、従つて人事の有爲轉變が人間の定命である事は否定し得ない事實である。人間は恰も操人形の如くに、此等の力に操られて行くのではあるまいか。目に見えぬ絲、宿命と名付けられる多くの絲が或時は環境の力となつて人を束縛し或時は慾望の力となつて其人を奔走させ、且は樂ませ或は苦める。纏て其絲が腐つて切れる時凡ての人は嗚呼一切が無に歸したと思ひ、且又尙も其絲に縋つてもつと長く生延びようと努力するだらう。生への執着。醜惡なる形骸。私達は醜い骸を涙を以て清めねばならぬ。

私は考へる。操絲が切れる時、人間は初めて所謂神なる者の絶對意志の束縛から離れて恰も鳥の様に自由の世界へ、ラブレの所謂「靈肉共に自由な天地で望む行を爲す」事の出来る状態へ飛躍し得るのである。死は無へ歸納する酸化作用ではなくして、凡有状態への一切の還元作用である。

十六世紀の佛蘭西が生んだ最も自由にして最も大膽な詩人ラブレは凡ての不自然を退け「生は死の準備ではない。」と云つた。彼の信條は「汝の欲する行を爲せ。汝自然に従ひて生きよ。」であつた。彼は憂鬱を嫌ひ哄笑を愛した。「笑こそは人間にのみ屬する唯一の特權である。」と彼は定義して居る。然し此笑も纏ては空虚の中に消行く物ではあるまいか。ラブレの朗らかなる哄笑の響が未だ消えやらぬ中に、佛蘭西には笑を是認すべき何等の理由も無くなつてしまつた。何等の正しい根底をも有しない樂天主義が其空虚な笑に消去つて、末期的姿が靜かに佛蘭西を覆はんとした寡圍氣の中にあつて、パスカルやモンテーニユの思想は胚胎したのである。モンテーニユの微笑みつゝ疑つて行つた其の姿、其處には餘りに人間的な苦しい幻滅と寂しい涙と空虚な

棘の皮肉が暗示されて居なければならぬ。

「人間は云はば一本の葦である。しかも自然の中で最も脆弱な葦に過ぎない。だが彼は考へる葦である。」

求道の苦行者パスカル。人類永遠の苦惱を苦み續けた彼の生涯、恐怖に苛まれた陰鬱な絶望的な真理の求道者。我と我との戦に疲れた苦行僧。彼に取ても亦人間は神秘的な存在であつた。人間は空しく幸福を求め。悠々たる自然を思ふ時、誠に憐みの極みである。だがパスカルは人間の偉大さに就て教へた。「然し人間は自然に優る。何故なら人間は考へるからである。微弱なる葦に違ひないが彼は考へる葦である。」ショウペンハウエルも云つて居る。「人間は考へる動物である。だが其は小數の人に限られて居る。其は哲學者の名に依つて與へられる。然らば哲學は總てを解決して呉れるか？パスカルは之に對して「否」と答へるだらう。パスカルは人間の弱さを觀察し其創傷の不治なる事、及び快樂の空虚永遠の苦惱に心を打向けるに止まらず、彼は人間の無智盲目なる事、人間の邪惡なる事を知つて居た。尙も彼は此人間を愛した。人間は悲慘である。だが之を自覺すれば此悲慘は光榮ある悲慘である。人間は地上の愚かなる蟲けらであると同時に、萬物の審判者であり不定の誤謬の榮算者で且真理の受託者である。「基督の神秘」に於て「我は我が死の苦しみに當りて汝を思ひたりき。」と云つた言葉は彼が懷疑主義の不安、厭世主義の絶望の悲しみを經て遂に愛の人に達した事を示して居る。愛は人々の醜い心にたゞへられた唯一の美はしい香りである。其は死を以て貰かれた愛であり涙を以て潤ほされた愛である。私達は弱きが故に互に愛さなければならぬ。私達は針と棘との皮肉を以て人の醜い部分を掘出してはならぬ。何故なら人は弱きが故に共に傷つき斃れるからである。互に傷つけ合ふ所の人間の淺ましう姿を私達の眼は快く受入れる事が出来るだらうか。

Count o'er thy joys thine hours have seen.

Count o'er thy days from anguish free;

And know, whatever thou hast been,

'Tis something better not to be……Byron.

汝が一生の時間が見來りし歡喜を數へ見よ。悶へなかりし日を數へ見よ。されば汝は如何なる人なりしとも、そば響る無なりしを幸とするを見ん。

### 三、一切の生命の惱み (ALLES LEBEN LEIDEN)

*Optimus ille animi videtur laetantia pectus*

自らに勝つ最良の方は己の心を惱ます鎖を絶ち、かくて悲しくとも一度に之を終るにあり。……………オヅキド

總ての人は生を欲し、生に縋り、生自己及未來に對する有らゆる希望を繫いで居る。だが人はどれ程澤山の幸福を其未來から期待し得るだらうか。來らんとする新しい日が今經過した今日の日と同一の物でないと云ふ事をば如何なる理由があればとて考へ出されるだらうか、人は其さへも考へて居ない。人は其を考へる餘裕を持つて居ない。人間の幸福は此處に存するのではあるまいか。「明日は、明日は」と彼は自ら慰めて居る。そして此「明日」が彼自身を墓穴に葬る迄、而して人間は墓穴に入る時其の考へる事を止めねばならぬ。此世の苦しみを味ひ考へる能力或は餘裕を有しない凡人 (Philister) は恰も酬を見ずして死に得る如く幸福である。人間「形而上的動物」は生きんとする意志に操られて、色々の苦痛を味ふ者である。本能の名に於て或時は快樂を追求し或時は自己の慾望——金錢慾・名譽權利慾等の満足に向つて突進する。人間以外の動物に於てさへ所謂生存慾の下に有らゆる行爲を貫行せんとするのである。斯の如き慾望は無限であるのに充足は制限されて居る。此處に於てシヨウベンハウエルの叫んだ「若し世界が意志の世界であるならば其は苦の世界でなければならぬ。」と叫んだ命題は眞である。人間の一生は意志と本能との鬭争の連続である。各人はア・プリオリーに意志の完全なる自由を信じて居て、其個人的行動に於て自ら意志の躍動を感じて居るのにア・ポステリオリーに經驗を通じて意志が自由でなくて却て必然に本能に従屬し、其傀儡となつて居るのを見る。且又人は生涯の始めより最後まで其認識力よりもたらず反省と解決の存するに拘らず其を如何とも爲得ず自身の性格を非難しつゝ其悲劇 (部分的に見れば喜劇かも知れぬ) を最後まで演じて行く。かくて既に人間自身の内部に發芽した鬭争の種子

は、より多くの闘争の實を結はんとするのである。苦の世界。醜の世界は初つた。

各人は其自身の裡に發見する多くの分裂的な矛盾の爲に苦惱する。之が爲凡ての現象は自己の純なる本性に直接映する事なく自ら作出した色レンズを通して映する故、絶對的、個人的安寧は失はれる、従つて満足の快感も幸福よりも不幸に導き、理想が實現して其頂上に立つ時、其人の本性は死の状態に落入るのである。敢てアリストテレスの説を信ぜずとも人生は禍である。誠にカルデロが「世は只夢。」の中で云つた「人の最大の罪科は其生れ出でたる事なり。」である。生命持續は苦痛の基礎的刺戟に依つて行はれ、苦痛は意志の完全さと智識の發達に比例して益々明瞭に認識される。有らゆる經驗、記憶は人間の苦痛を認識的に深めて行く。かくて「より善いと云ふ事は善い事の仇敵である。」と云ふ諺が眞であると同程度に眞の幸福、永久の平和は絶對に存在しない。

理論的に見たる人生の極としてシヨウペンハウエルは次の三つを擧げて居る。

第一 Rajoguna 羅階……強し慾を激しい熱情(慾)の客觀の大きさは其が意志を動かす度合に依る故、外界の條件に關係しない。

第二 Sattva-guna 薩陞……純粹の認識で、認識が意志の使役を離れて觀念を會得する天才の生活。

第三 Tamo-guna 多磨……意志を惰り、其に伴ふ認識も寢入つてしまつて、只空の思慕と生命を惰眠させる退屈。

是は實際的の人生の成分と見る可き物である。一個体の生命が此三端を離れてじつと止まるのは甚だ稀な事で、多くは二つ三つのいづれかに少し接近して左右に彷徨し、些細な物を誦め欲求し其反復して僅かに退屈を逃れる。

私達は孤獨で不幸であり他人と交つて不幸である。満足は倦怠を、怠屈は生命現象の弛緩を持來たす。運命に抗する時其肉體は傷けられ、運命の導く儘に行く時、其精神は知らず／＼に其力を失つて居る。外見的快活、幸福は無智、無經驗なる物の上にて初めて建て得らるゝカモフラージュである。此衣裳に依つて凡ての人は眩惑され互に幸福だと感ずる。人間に取つては幸福だと感ずるだけで充分だ。或は其が直に所謂幻滅の悲哀と變ずる性質の物であるとも。笑に依て自ら強て自己の幸福なる事を意識せんとする處に既に悲劇は發生する。併も其は餘りに人間的な悲劇である。何となれば笑は人間の本性を被んとする假面に過ぎない



からである。

生きんとする意志は自分自ら戦つて居る。主我は一切の戦闘の出発點と成り、鬥争(争ひ)は凡ての生命を破壊せんとする様に成つた。彼の「狂氣は苦痛からの避難所也。」とすれば、其は人類の修羅場を指示する物でなければならぬ。特に近代的社会の混亂状態に於ては我々の神經は興奮し、末梢神經のみが蒼白く震動する様になり一切が尖端化し、銳角化して來た。此中に於ける繁雜な騒音は生と死の闘争の叫びであり、戦に立つ小つげな人間の悲鳴である。相互に利益を害し、誇を傷け、慾望を蹂躪しかくして本性と本性とが赤裸々に傷け合ふ。智能と意志と情慾とが三巴になつて混戦状態に落入る時、是人生の狂亂である。智能は意志の使役する處となり、意志は情慾の隸屬物となり、生の悟性が之に向つて突進する。かくして耐難い苦惱に依て蝕まれた本性は狂亂に依り、一切の連鎖、苦惱の絆を忘却し去つて虚無の状態に達する、狂亂は苦難を避ける道として人間を訪れて來たのである。

だが尙最後の一切の救済として死が訪れて來る。死は人生最終の隱居所である。生の盲目的意志に對する永遠の勝利。かくて凱歌は死の榮冠を壽ぐが如く、中空に舞ひ、眞の幸福、永遠の平和は、死の甘つたるい伴奏に伴なはれて傷けられた心を癒しつゝ、昇るが如く、飛ぶが如く、吾々の魂を恍惚境へ導く。死の幕、其は人間凡ての錯覺に依て黒く不氣味に感ぜられた幕が黄金色の光を反射して麗しく輝く。此處に於て、醜は美に、偽は眞に、惡は善に、一切の次元の廻轉に依て負は正に移り行く。落付かない意志の穢はしいカタストロフだつた。新しい生活が美しい死の音楽と共に徐々に奏でられて行く。嗚呼其は眞善美の世界だ。

靜かに反省する。僕達は何故に苦痛の多い結果を生むに過ぎない所の此騒ぎに惑はされただらうか。何故に新しい争闘、刺戟を求めて棘荆の中を狂ひ廻るのだらうか。何故に人間社会は、いつまでもセクスピアの悲喜劇をかくも繰返へさねばならぬだらうか。僕に取つて今やカーライルの必要を禍さへも取除かれ、永遠の肯定は永遠の否定の上に立ち、生の意志は其曲つた面に嘲笑冷罵の磔を受けて居る。人間の世界は偽りだつた。だが僕は欺かれはしない。死に依つて與へられる福利の最大量が今や僕の心に

滿々して居る。

#### 四、新しき解釋

「生」に對する懷疑は哲學の發生以來、種々なる形式に於て論議せられて來併して過去の凡ての偉大なる思想家が種々なる相違にも拘らず、尙生の重心と彼等獨自の勞作の意義を思性の彼岸に、生の裡に追求し來つた事を、知つて居る。誠に現代が、生其物の表現を歴史的世界の裡に把握せんとする飽く事なき努力の中に生長して來た事は明かである。幾多の新しき哲學の創造の道への暗示は、新しい時代に向つて新しい認識と思想とを掬み出す事を要求して居る。ハイデッガーの云ふ如く「人間の現存在 (Menschlich Dasein) の振動を擴大しつゝある。」現代は新たに實踐的躍進を爲すべく、思惟的人間の人間の故郷とも云ふべき哲學的思索の根源的地盤を固定し來つたのである。

此處に於てハイデッガーは現代人の精神生活及び哲學の最大の缺陷と、且最も要望せる「存在論的なる物」或は「形而上學的なる物」を我々に提供せんとして居る。ショウペンハウエルに依つても明らかであるが、彼も亦、人間が常に形而上學的要求を持つて居る者なる事を前提として居る。従つて形而上學は人間の本性 (Natur der menschen) に屬する物である。而して彼は存在の探究に於て最根源的存在を無に歸して居る。「無」こそは自由なる存在であつて「物」や「心」が依存する所の根據である。「何故に一體存在する物があるのか、而して寧ろ無ではないのか。」と云ふハイデッガーの問は、光ある生か、暗黒なる虛無か、一切か然らずんば無かの根本問題に對して、我々の全生命を賭 (Einsatz) として投出さしめて居る。此處に彼の稱する「無」は全存在者を其自体に包含せんとする即現實的の思潮であつて、單なる虛無主義ではなす。

存在者即ち有と無の關係を中心問題としてヘーゲルは「純粹存在と純粹無とは同一である。」と云つて居る。ハイデッガーの所謂無の否定せる物を更に否定して無其物に還る様式はヘーゲルと同一であるが、決して唯物辯證法では無いのである。存在と無は一であり相即不二である。存在あるが故に、無に依る否定の故にのみ、持續的なる人間的生の躍動がある。かくてハイデッガ

人は人間の存在を含むあらゆる存在者を、依つて立たしむる所の地盤、其は躍動であり、永遠の今に屬する現實的の、一層存在である處の、世界を我々に指示したのである。ベルグソンの純粹持續も、ニーチエの超越せらるべき或者をも、或はショウペンハウエルの「意志と現識としての世界」に於ける永遠の無も、此處に於て接近して來る物である。

「人は如何に死に面するか？」是はハイデッガーと共に、生存の指導原理を見出さんとするカール・ヤスパーズの説明に依つて明かにする事が出来る。

フツセルの構成的現象學を行詰らした存在の一つは此死の現象であつた。意識的現象學に於ては、死は超越であり、説述、分析、構成の外にある、ハイデッガーは「死」に現象學的存在地位を與へた。彼に依れば死は人間の存在の時間性を示す物であり過去に屬する過程に於て、人間は自己自身の無と關係する。無は自己の一つの時間的姿であり之を意識する事に於て人間は自己自身に達し、自己自身を發見するのである。即ち人生は死を中心として問題と其解決の範圍を定められる。

ヤスパーズは「死は超越であり、死に至るまで人生は體驗出來るが、死自身は體驗出來ぬ。」と云つて居る。彼は人間が一定の危険なる場合、例へば死闘争偶發事等の場合に於て最も眞劍に自己の本性に立ち歸る時、此情態を極限情態(Grenzsituation)と名付けて説明して居る。積極的に云へば人生が内在的合理性と理解可能性との極限に直面したる時、何處に其人の立脚地(Heft)が存するかと云ふ問題である。ヤスパーズは此「立脚地の可能性」を次の二つに大別して居る。

一、限られたる物の中に於ける立脚地。……：相對的な落着點の絶對化。之に對して殻(Gehäuse)なる名稱を附し、例としてかたつむりの家を土臺に考へた一個の團を擧げて居る。

二、無限の中に於ける立脚地。……：永遠の行路の中に實現して行かんとする最も根本的な、最も積極的な思想で此處に於て人間の存在の開明(Existenz erhellung)即ち自己解釋に對する道標を獲得せんとして居る。

即ちヤスパーズは此極限情態を人生當體の説述の出發點として居る。「此死とか負擔とか云ふ極限情態は、理論的、内在的に理

解された人生に依つては最早了解される事が出来ず。今や人生の超越が吾々の住む此方の世界の内に於て突入する爲の天井窓となつて居るのである。」

此純粹の内在に於ける人生即ち日常生活性 (Alltaglichkeit) から人生の極限情態即ち死が、人生の死として、理解され得る物である。

## 五、十と一のイデア界

多くの人は十に對する一として、有に對する無、即ち積極に對する其を否定した概念として取扱ふ。特にカントに於てもそうであつたか、此處に於ては特に善と惡のイデアに限定して見よう。

論理學上イデアが初めて重要な意義を有するに至つたのは、プラトーンの善のイデアである。夫はイデア界中最高位を占め、己れ自ら實在性を有せずして、而もよく一切のイデアに實在性を附與す。イデアの現象に對する關係が目的論的に理解せらるゝと共にイデア界其物も一の目的論的体系をなすと考へらるゝ様に成り、道徳が實在の最後の根柢を爲す事が明かにされた。カントは實踐理性批判にして自由、靈魂の不滅、神の存在の三イデアを道徳の要諦 (Postulate) として設定した。此三者は彼の純粹理性批判にては認識の最後の統一を求むる理性の必然に想定する處なれど經驗の範圍を超越せる物自體の世界に屬する概念ならばとの理由の下に蓋然的に許容された迄であつたが實踐理性批判に於ては其實在が積極的に肯定された。(哲學辭典より)

今 Ideend Akt はイデアを單に諦觀するに止まらずしてイデアを産み出す働きでなければならぬ。

今意志は自由なりとするも、意志の自由に對する反作用的の必然性即ち自由の中に被造物なる物への嗜欲が呼起される場合が存在する。僕等自身の中に存する特殊の意志と所謂普遍的意志との結合は其自身既に一つの矛盾である。之が統一の不可能でないまでも、困難なる事は明かである。生命其物の不安が人間を驅つて、彼自らの中に創り出されたる中心を去らしめる。かくて人間は生きる事を得る爲に、凡ての我性に於て死した物とならなければならぬ。従つて此中心より周邊に歩み出で、かくて其處

に自己の我性の安息を求めんとするのは殆ど必然的の企である。是よりして惡の普遍的必然性、及び淨化される爲に總ての人間の意志が通らねばならぬ火である所の我性の實際の死滅を來さしめる死の普遍的必然性の存在が確立せられる。

ライブニッツの云ふ如く意志が善一般に向つて努力する物として、惡は自然的缺乏より生ずる物とするも、積極的なる必然的の惡が何等かの暗い原理の活動の中に生じ、其の根柢の獨自の活動に依つて、其普遍的作用にまで發展したる事を否定できない。人間は良心に反しての行爲其物の可能性を是認し得るからである。フイヒテは惡に就て「永き習慣に依つて自己を無限に模造しそして纏て善の全部的無能力を致さしめる意情こそ眞の、生活の、人間の、自然其物に存する根本惡 (des Radikalböse) である。」と云つて居る。カントが根本惡は人間の生得であつて自己内部に發見せられる物であると言つたのは、たとへ其が餘りに普遍的なる豫想であるとも、眞なる言でなければならぬ。

惡が一般的に表現せらるゝと同時に、人間は我性と我慾とに於て自己を捕へた。産れる一切の者は惡の暗い原理に纏はれつゝ、産れて來る様になつた。人間の精神的虛妄の想像や非有に向ふ認識に依つて、虛偽や虛妄の精神に對して自己を解放した。然し凡ての個々の人間の裡に存する所の暗黒の深底の中に輝いて居る生命の閃光が惡の恣意的なる活動を抑制する。シェリングの「恣意的なる善は恣意的なる惡と等く不可能也。」との宣言は、其の裏に善と惡との根本的對立を證明する。此處に至つて僕等は有らゆる生命に附着せる悲哀の中に、全自然の上を覆ひ曠がれる憂鬱の中に最高の存在、一切中の一切 (Alles in Allem) なる神の可能性を信ぜしめられる。其は闇の世界と光の世界とを一つに結び付けて十と一の兩原理を自己の實現に於て一致せしむる物でなければならぬ。併し之に對して反動的二元性がより強く成りはしないだらうか。善は神と共に永久に生きんとすれば闇から現實性にまであげられねばならず、又惡は永遠と非有の中に突落されんが爲には善より分れねばならぬ。創造の窮極目的は此處に生と死との必然性を告げる。何となれば最後の審判に於て、善は惡より分れる爲に惡も善より分れる爲に死ななければならぬからである。

かくて神にもましてより現實的で、より高い原理である爲に愛なる物が提出せられる。愛こそは統一の原理である。何となれば

ば絶對的の自己と思はれる其自身の精神が他者の裡に於て、又他者と共にのみ絶對的であり得るからである。各自が一つの全體でなくてはならず全體の部分に過ぎないならば愛は存在しない。各自が一つの全體であり然も他者なくては無く、又有り得ないと云ふ。正に此故に愛が存する。

フイヒテの「より高き、眞なる道德の立場」(die höhere, wahre Sittlichkeit)より精神世界の爲の法則が、最高の物、第一次的の物、そして絶對的な物とせらるゝに於て、彼の超感覺的なる純粹存在(das reine Sein)の概念が固定せられる、其は常に純粹作用(actus purus, esse in seipso)を意味する事に依て、作用の抽象的概念の代りに、具体的な生活の概念が包含せられ、従つて純粹存在の概念の無内容性をば免れ得る物である。其生活の概念は實在的にも、價值的にも、最高なる物、即ち實在と價値との同一作用を表はす物と考へ、フイヒテは是を愛と呼んで居る。彼は云ふ。「生活は淨福である。何となれば生活は愛でありそして生活の全き力と形式とは愛に存し、愛に生ずる。其自體には無生命なる存在は、愛に依つて分たれ、自己を自己の前に立たし、分れたる事に依て自己を達觀し、かくて知識する處の我(Ich)となる。總ての生活の根本は此我の我たる事である。翻つて愛は分たれたる我を結合し合一する。此統一に依つて止揚せられず、そして永遠に留まる分立性(Zweierheit)の統一こそ生活である。」其愛は總ての在る所の物を、單純且絶對的なる存在に結合し、是等を眞實に在らしめる物である。更に彼は云つて居る。「汝の愛する物其を汝は生きる。其指す所の愛こそ汝の生命である。そして汝の生の根柢の中心であり、坐處であら汝の裡なる、物凡ての生の力、其等が此唯一の中心點に向ふ限りに於て、汝の生活が存在する。」

更に愛、意識の内面的必然より出發したデカルトが實質と物體の中にのみ發見した機械觀を、より高く神にも精神にも見出す事に依つて、スピノザの「神の知的愛」は宇宙的綜合の最高知識にまで到達する事が出來た。彼は哲學の爲に萬物を捨てて事に依つて、永遠の相の下に(Sub specie aeternitatis)不斷の最高幸福を發見し樂しむの能力を獲得して、次の如く云つて居る。「永遠にして無限なる一物に對する愛のみは、有らゆる苦痛から離れたる完全な快樂を以て心を養ふのである。——最大の善とは精神が全大自然と共に有する所の統一の知識である。然して又彼に取つて、其は意志の世界ではなくして運命の世界であり、

善も悪も永遠の實在の認め得ない所の僻見に過ぎないのであつた。「世界が單に人間の個別的理想のみでなく、無限の赤裸々の姿を映し出したのは正當である。善惡に於けると等しく、美醜も同様である。是等二つは主觀的、個人的の言葉であつて、之が宇宙に投げかけられる時は恥を以て、投げた人に戻つて來るだらう。」

此處に吾々はプラトーン(所謂、愛を道德の第一原理又は諸原理の一と見たギリシヤの思想で、プラトーンの愛は心靈の本、即ち善美のイデアに還らんとする人心の希求の意味であるから、諸欲情を超越する力、従つて諸欲情を可配統御して、諸徳を成就する力と見る。)をも超えて、其審美的判斷の眞實性と永遠性を認める事が出来る。併して「神の知的愛」はスピノーザの「神の屬性 (attributum) は無限であるが故に、神は無限の世界を包含して居らねばならぬ。」と同様に無限であり、主觀と客觀とを一致して宇宙實在の極點に迄達し得る物である。

## 六、エビローグ

鐘も鳴ります、撞木も鳴るよ、鐘と撞木で音がする。

幽かに暮れて行く日の夕闇の中に立つて、うたかたの人の運命を心行くまで、みつめて居た人達、或は古い昔の支那の傳説に有る様な大自然の樂しき無爲の生活 (Dolcefar niente) の中に靜かに思維を索めた人達の心の内部には、一種の諦めに似た人生觀を見る事が出来るだらう。此人生諦觀は所謂悟道に徹し切つた高僧の思考の世界を待つまでも無く古代より現今、更に未來に従つて美化されねばならぬ物である。或は其が想像と幻想と追憶の中より、あみ出された物でなくとも、其處には感傷的な夢や抒情詩的な憧憬、冥想的な憧憬や孤獨、愛、神が存在し且又物のプラトンの理念にまで理想化された世界でなければならぬ。

是は單に浪漫的概念の世界であるかも知れぬ。だが一度、現實に眼覺める時、一切が灰色だつた。微弱な二足獸の人間生活は幾千年となく極めて平凡な、しかも絶えざる自己破壊と社會白自己確立の暗闘の堆積に過ぎぬ事は歴史の證する處である。無限無窮の空間と時間、有限な微量の人間の存在、彼に對すれば殆ど無に等しく其中に没して了ふが如き一塵の群。其生存には唯

相對の何時何處と云ふ事のみあつて絶對はない。其本當の生存は唯現在あるのみで、生命は常に過去に過ぎ去り、常に死に向ひ常に死しつゝある、形式上より見ても、現在が絶えず死の過去に葬られ行く不斷の滅亡である。更に萬物流轉の原理はよく此人間を支配し、冷厳な因果律は無慈悲にも人間の幸不幸には没交渉で人生を支配して居る。此變更されない恒久の鐵則の前に、人々は、只一色に灰色な現實の姿を、そして單に空虚なる夢に過ぎない所の淺薄な人間的慾望の次から次へ幻滅され行く悲哀の姿をしみじくと見せつけられる。因果率。僕達は如何に悶搔き焦燥るとも、此外には一步も踏み出す事は出来ない。かくて無限の絶望と倦怠と煩悶とが残される。僕達は正宗白鳥を思出すだらう。宗教にも絶望し、人間にも絶望し、そして一切の天地は一色の虚無觀で塗りつぶされて居る。きたない自己と貪慾の塊ある以外の何物でもない。其處には人間が底知れず吹く淋しい冷風の中に、假面を體裁よく、つくろつて、醜い欺し合ひと激しい鬭争を演じて居る。だが僕達にはノヴァーリスの「青い花」の世界も餘されて居る。其故に、現實を逃走して神秘と觀念の世界に閉ぢこもり得る物である。美しい日の出と麗かなる春と、銀色に輝く星と、漂ひ行く妙なる音楽とが僕達を待つてくれる。世界は夢となり、夢は世界となる。嗚呼凡ては有るが儘に、是なる物も非なる物も。

Sed via jes estu jes : Kai via ne estu ne ; par ke vi ne falu sub jungon.....DE JAKOBO Cap 5, 12

(唯汝等然りは然り、否は否とせよ、罪に定めらるゝ事なからん爲なり。)

——終り——

### 參 考 書

シヨウベンハウエル 意志と現證としての世界

久保 正 夫

フイヒテの哲學

姉 崎 正 治

ヂェーラント 村 松 正 俊

西洋哲學物語

西田 幾多郎

善 の 研 究

其他雜誌「理想」に負ふ所多し。是は單にモザイク的な私の感想文に過ぎぬ。たゞ是が龍南人への新しき道を開拓して來れるならば幸ひである。